

あたたかな梅の春

辻 憲男（文学部教授）

「彼の復讐の挙も、彼の同志も、最後にまた彼自身も、多分このまま、勝手な賞讃の声とともに、後代まで伝えられることであろう。—こういう不快な事実と向かいあいながら、彼は火の気のうすくなった火鉢に手をかざすと、伝右衛門の眼をさけて、情無さそうにため息をした」。「このかすかな梅の匂いにつれて、冴え返る心の底へしみ透って来る寂しさは、この云いようのない寂しさは、一体どこから来るのであろう」（芥川龍之介「或る日の大石内蔵助」）。

元禄16年（1703）の正月某日。事件後細川邸預かりの身で御沙汰を待つ日々、当番侍と浪士たちの会話を聞いた。「不快」というのは、仇討ちを快挙ともてはやされること、変心離脱した元藩士らを非難すること、自分が京で遊興にふけた伴狂（偽装）をほめられること。あたたかな「満足」が消え、微妙な「寂しさ」が胸を浸した。武士も町人も忠義の美談にはしゃいでいる、だがあれは恥ずかしい騒動だったかもしれぬ、まして、自分の放埒（ほうらつ）な生活をすべて大義のためだったと「激賞」されるのはうしろめたい、正直に言って、自分はその遊樂の中で“憂き務め”（仇討ち）を忘却した瞬間さえあったのだから…。

だれも復讐などしたくはなかった、というのは近代人の思考かもしれない。内蔵助の「寂しさ」は生の孤独のそれであろう。己の生きたあたたかな44年間への、なごりの愛惜でもあろう。たしかに“報復は何も生み出さない”。



兵庫県赤穂市の城跡。小説は1917年、芥川25歳の名品。